

——紫煙隨想——



——長城視察に——

萬里の長城

八月十三日の朝、北京の旅館を出立し、我々一行は萬里の長城を見物するため、自動車に乘して、北京城の西北隅である、西直門停車場へと急いだ。曇天のため壯快な涼味を感じた。

午前八時三十九分發車、之が所謂京綏鐵道と稱するもので、北京を起點とし蒙古の入口である張家口を経て、綏遠に至る鐵道である。これは明治三十八年の起工で、新疆まで延長せんとする計畫である。この鐵道は全く民國人の手にて成つたもので、詹天佑と云ふ米國で研學した技師に由つて、建設せられた。

北京を出發して約二時間半、行程二十五哩餘にして、南口に達す。此處までの間は平原で、直隸大平野の北端をなし、南口より天下第一塞と呼ばれる居庸關の峻に入るのである。南口より北進すると、左右次第に山が迫り來り、深山幽邃の境と變じ、脚下の谿谷には、中國には珍

しき清き流れが、巨岩奇石の間を縫つて奔流し、汽車は又時々トンネルを出入する。

人間の殆んど攀ち難い様な、斷崖絶壁に沿つて、長城の建設が所々に見へ、又隠れる。この様な險阻にして、又風景の幽邃なものは、我國の汽車沿線にも、稀れなことであらう。従つてこの鐵道建設が難工事であつたことは想像し得らるゝ次第である。

南口より十一哩で、青龍橋驛に達す。北京より三十六哩で、約三時間を要した。青龍橋驛で下車すると、驢馬を賃して行くことも出来るが、我々數人は徒歩で坂道を登つた。十數町にて八達嶺の長城に達した。汽車は青龍橋驛を發すると、八達嶺のトンネルを通過し、直ちに高原に出で、それより西北張家口に向ふので、八達嶺の長城に上り、展望すると、汽車がこの高原を長蛇の如く、奥知れぬ西北の天地に黒煙を引いて走る有様は、如何にも大陸の壯觀である。南方は太行山脈重疊して、十一哩の溪谷を通じて、直隸の平原に出て居るので、問はずして此處は、北方から中京へ出る唯一の、又最も難所とする、關門であることが知られる。所謂北門鎖鑰で、我國昔時の箱根の關所である。北兵一度この關門を超ゆれば、中國又漢民族の朝なきと云ふべく、實に咽喉の地と云ふべきである。

長城の望臺の一廢墟を臨時の店とし、長城の煉瓦を腰かけとして、茶を賣る處あり、ここに暫く休息して、携へ來たりし辨當を食した。茶店より更に六七町を隔てゝ、一層高き所に、更に一望臺が見へる。呼べは正に答へんとする、目睫の間にあるが、峻坂急直して登臨は容易でない。特に肥滿の私には困難であるので、終に三人の苦力を雇ひ、左右及び後より助けしめ、漸くその頂上に達した。展望は實に雄大である。獨登高樓望八都と云ふ唐詩の慨がある。眺望を取つて居ると、冷かな風が徐むろに吹き來り、秋涼を感じしめた。名詩である涼秋八月瀟關道、北風吹斷天山草を想ひ起すのである。天山は猶遙かな西又北であらう。崑崙山も又更に天涯の遠い所であらう。併し見渡す限り、所謂塞外で、胡笳の一曲も聞き得た所であらう。秦時明月漢時關で、假令感傷の詩人ならずも、多少でも唐代の詩文に接したものは、感慨無量である。

萬里の長城は、城と稱呼するも、我國の名古屋の城とか、姫路の城とかとはその構造に於て全く別物である。歐米人は Great wall of China と呼んで居る。そのウォール、壁である。八達嶺から大觀すると、多くは分水嶺に沿つて、建設せられて居るが、或は深く溪谷に入り、山腹に

顯はれ、山又山を超へ、遠く遠く西と東へと隱見しつゝ連つて居る。而してその壁上には、所々に望臺や烽火臺の備へが見へ、昔時の征戎の兒が偲ばれて、人をして愁殺せしむるものがある。

萬里の長城は、黃海の波打つ邊りの、山海關から起つて、西の方甘肅省の西安付近に達して居る。經度では約東經で九十度から、同百二十度に涉り、緯度では北緯四十度の線を出入して直隸、山西、陝西、甘肅の四省を通過して居る。長城建設の目的は、素より支那中國の國防のためであることは勿論である。而してその建設者は、秦の始皇帝と一般に信ぜられて居る。併し春秋戰國時代以前より、所謂戎狄民族が、中國本土即ち中京に散在して住居し、屢々中原の民族即ち漢民族と、葛藤の種を蒔き、絶へず累をなして居たものであつた。それで春秋戰國時代から、趙であれ、燕であれ、又魏であれ、何れも要塞を北境に構へて居た。故に萬里の長城の一部と云ふものは、秦の始皇以前に、既に存在して居たものである。所が秦の始皇が初めて、中國を統一して、帝國を樹立した時に、その前代のものを修築し、又之を連鎖せしめて、ほぼ今日の狀態と、ならしめたのである。始皇はその將蒙恬をして、三十萬の兵を率ゐ、北方匈奴を討たしめ、長城を築いたのである。その後には隋の煬帝が再びこの長城に大修繕を加へたも

のは、今日そのまゝの長城である。

兎に角長城を大成したのは、秦の始皇である。故に長城と云へば始皇を云ひ、始皇を語れば、直ちに長城を聯想せしむるのである。この始皇は五百人の儒者を坑にして殺し、天下聖賢の書を悉く集めて焼き棄てたので、有史以來の暴君と思はれ、従つて萬里の長城も無用の長物で、徒らに帝王の富力、威力、虚榮、暴想の産物に過ぎないものとせられ、古來儒者にして始皇に讃辭を呈したものを私は聞かない。漢代の史家大史司馬遷も、史記に於て、北方に遊び親しく長城に登り、その事業を見て、始皇の將蒙恬が、徒らに功名の念に驅られ、無用の業を興し、人民を塗炭に苦しめたりとて、始皇と蒙恬を責め、特に蒙恬の悲惨なる末路に、無殘なる筆誅を加へて居る。然し私はこの點に於て、無條件で大史公の史筆に同意することは出来ない。

長城の長さは、何人も精確に測定調査した記録はないであらう。併し經度から計算すると、約二十四度に亘つて居る。北緯四十度附近の所に於て、經度一度を約二十里と算し、長城を一直線と見做せば、約五百二十八里となる。然るに長城は所により、二重に建設せられ居り、支

線が作られ、山を越へ谷を渡り、迂餘曲折を極めて居るから、如何に最少限に見積つても、壹千里を下ることは、斷じてなかるべく、支那の里程で算して、萬里の長城は決して誇張ではあるまい。

八達嶺附近に於て、北方に面したるものを外壁とし、南方に面したるものを内壁とすると、外壁の高さは地上約二十尺内外で、内壁は約十七尺内外である。この兩壁の間に土砂を盛り上げて通路となし、この通路上に立てば、外壁では顔のみを露出して、北方から來る敵に對することが出来る。通路は自然石を加工したるものを以て鋪裝して居る。内外壁は煉瓦を積み上げて築造し、石灰の漆喰を施してある。若し煉瓦の大きさを、縦一尺五寸、横一尺、厚さ三寸とし、長城の延長を千里として、計算すれば、二十三億四千萬枚の煉瓦を要することとなる。又煉瓦一枚の時價を五十錢とすると、全部の價格は十一億七千萬圓となるのである。又通路の敷石を二尺、一尺、七寸の寸法とすると、一億三千五百萬枚を要し、時價一枚五圓とすれば、全部で六億七千五百萬圓となる。故にこの材料のみにても、約二十億圓近くの金錢を要し、今日我國全土の鐵道建築費を遙かに凌駕するものである。

名將蒙恬が三十萬人の兵を率ゐ、十數年の歳月を費して居る。之を延人員にすると、數十億の人数を要し、數十億圓の人事費を要して居る。之を前後の修理や添加等を悉く算入すると、長城建設のために費したる金額は、三百億を下らぬものと想像せらるゝのである。

又長城に沿ひ數町を隔てゝ、二萬内外の望臺や烽火臺が設けられてある。猶所々に關門もある。起點である山海關には、大なる關門が設けられ、天下第一關と云ふ扁額が掲けられてある。之等關門には嘆賞に値する、藝術的作品は可なり多いことも、よく世間に知られて居る。

試みに長城築造に要した煉瓦に就いて一考して見ると、先づ煉瓦に用ひる粘土は何處より得たか、得た粘土は之を粉末にし、水にてねり、型に入れて煉瓦の形に仕上げ、之を乾かし、更に燃料を使用して、之を焼成しなければならぬ。しかもこれは人煙遙かな、僻地で行はれた事實を考へる丈けでも、容易な事ではなからう。更にこの煉瓦や切岩を、人跡稀れる、又人馬を近づけ難い、斷崖絶壁の山頂や谿谷に運び、建設した工事は殆んど超人的の事業としか、思はれないのである。

この萬里の長城は、果して豪奢虚榮の暴君の氣まぐれ事業であるであらうか。この超人的難

事業の衝に當りたる蒙恬を、何故に大史公は苛責筆誅したのであらうか、疑はざるを得ない。

長城自體はその自然の地勢から見ても、又文化發達の經路から考へても、亞細亞大陸のその部分に於て、自然的に民族の分水嶺を作つて居る。北方は遊牧の地であり、南方は農業の地である。一方は野蠻で、他は文化であつた。而して文化人である漢民族は、野蠻である北狄人のため、歴史あつて以來、絶へず苦められた。始皇は自分の民族が、祖先以來苦められたこの外敵を、千里の外に驅逐し、胡馬をして陰山を度らしめず、漢族子孫のため、恒久の安定を根底とする國家的觀念より、發意したものでなからうか。自分の如き前古比類なき大帝王が、正しく計畫すべき當然の義務責任であると云ふ、崇高なる觀念に驅られて、遂行したる一大國防事業であつたのではなからうか。

私は萬里の長城に登臨して始皇帝と、その名將蒙恬に限りなき、敬意を捧げたい氣分がせられた。長城は今日に於ては、或は無用の長物かも知れない。併し長城の價值は、物質的ではなく、今日に於ては全く精神的である。西洋の文化を誇る、世界七不思議の隨一である埃及のピ

ラミッドは、その容積から計算すると、長城に比し七十分又八十分の一にしか當らない。獨りその規模のみではない、埃及の平原、又ナイル川の交通運搬の便なりしに比し、この方は山又谷で、彼の名將豪恬さへ、地形により險を用いて塞を制す、臨洮より遼東に及ぶ、延長萬餘里、或は地脈を絶つかも知らず、罪死に當ると云つて、自ら毒を仰いで死んだ。建設者豪恬自身さへ、自然を征服した大工事に茫然自失恐怖を感じた超人的の大工事である。實に永久に亞細亞人のため、萬丈の氣焰を上げて居る。然るに土地僻陋不便にして、長城に關する調査記錄の缺乏は、實に残念至極である。萬里の長城の調査研究は、對支文化事業と云はず、全亞細亞文化のためにも、是非計畫すべきことと考へる。

(大正十四年十月)

(以上は大正十四年外務省對支文化事業學生視察團の團長として外務省へ報告した一章である)

學生劇とヴェヒシュタインのピアノ

學校の開校後大正十年初の天長節を迎へた。當日は何れの學校に於ても拜賀式を舉行し、御眞影を拜し勅語を奉讀し、校長が訓話をすることは恒例であつた。我横濱高工では拜賀式がなかつた。しかし天長節は我國の最大祝日であるから、最も盛大且つ賑やかに奉祝すべきである。猶又青年學生が當然皇國臣民として持つべき矜恃から、特にその意義を表顯すべき絶好の機會として、何なりと以上の趣旨に副ふべき計畫を立て、以て大いに奉祝すべきであると警告した。處が全校勇み立ち、彼れ此れと協議した結果、學生劇を催して、大々的に天長節を祝賀することになつた。何日か學課まで休んで、晝夜兼行でその準備に大奮であつた。講堂で演ぜられたが玄人も洗足の出來榮へであつた。お客は學校教職員の家族を初めとして、學生の朋友知己で超滿員の盛況を呈し、散會に當つて一同で聖壽萬歳を三唱した。講堂も破れん許りの萬歳の

聲が宮城までも達した氣がいたし、朗かな學生の氣焔が多幸な學校の未來を約束したかの様に、私は満足を感じた。計らずも學生劇が校の内外に人氣を呼び起し、翌年は横濱開港記念會館まで出て行き満場立錐の餘地なきまでの發展ぶり、學校開校記念祭と共に天長節祝賀學生劇は横濱市年中行事の呼び物となつた。あれだけ大仕掛けの學生劇に一文の入場料を取らず、又取る氣もなかつた。當時の學生氣分と天下泰平は、今から考へると實に隔世の感がある。

處が突然學生劇に異變が起つた。謹嚴そのものの様な岡田良平氏が文相に新任するや否や、學生劇は罷りならぬと嚴重なる禁止令が、全國の直轄學校へ傳達せられた。學校長としてこの禁止令に對抗する何物も持たない。唯々諸々として命を奉ずるより外がない。可哀相なのは學生のみである。おやじが嚴格過ぎると子供は立つ瀬がない。そのまゝにして置くと親の知らぬ蔭へまはつて、どんないたずらをするかも知れない。折角夢中になつて遊んで居る子供の頃からそんな危険な玩具が、まかりならぬと、おやじがもぎ取るならば、思ひやりのあるおふくろはそつと何んでも新しい玩具を他の手に握らしてやらねばなるまい。この新しい玩具が我校の

ヴェヒシュタインのピアノであつた。

私は音楽には素人と云ふよりも全くの耳つんぼである。君が代と螢の光と校歌より外の曲は何一つ聞き分けが出来ない。それにもかゝわらず、ピアノの新調を思ひ立ち、新調するなら最良のものに若かずと、當時樂器屋にも只一つしかなかつたヴェヒシュタインを購入した。五千幾百圓と云ふ金額は學校としては思ひ切つた支出であつた。このピアノを中心として我校の天長節學生祝賀劇が祝賀音樂會と代り、それより長い間、市民との親しい關係が出来た。これと同時に校内學生間の音樂部は異常な發展をして終に立派な管絃樂部が成立する様になつた。

毎年三月の卒業式には、國歌と校歌の合唱は管絃樂の演奏と代り、螢の光を以て來賓の退場を送り出した。何處の學校でも見られない壯嚴な光景は、私に取つては忘れられぬ感激であります。

岡田文部大臣は在任中一度來校せられ、校内視察をした。殺風景のブラック講堂には何物も見ろべきものがないが、天井の低い馬鹿に廣い演壇の上に、大ピアノの安置してあるのが何人

でも注意を促がさずに居られなかつた。私は大臣から質問を受くるに先だち、この大ピアノ購入の由來と、學生音樂部などの事を説明した。謹厳そのものの如き岡田大臣は私の釋明に對し、何等可否の返答なく黙殺せられた。恐らくは腹の中ではするい皮肉な校長の奴位に考へられたかも知れない。しかし私には寸毫の不平もなかつた。

大ピアノを中心として、我校の音樂部は隆盛を極め、委員長であつた應化の學生山下博君が大に活動したが私にも可なりの苦勞をかけた。山下君が私を見ると世界的のピアニスト・ジンバリストがとやり出すので、門外漢の私もお蔭でジンバリストと山下博の名は今に能く記憶して居る。そのジンバリストはヴェヒシュタインのピアノの宣傳のため旅行して我國へも來たものと云はれて居る。

學 校 と 自 動 車 と 運

東京藏前高等工業學校機械科の教授松浦和平君と私は至つて懇意の間柄であつた。松浦教授は所用のため米國へ出張し、在米中自動車を乗りまわし、歸朝の際持ち歸つた古物を、高工で買はないかとのことであつた。大正十二年八月三十一日の祭日に、松浦教授と同道して、件の古自動車を修理して居る東京市外長崎村の或工場へ行き、現物を見て賣買の約束をして歸つた。

この自動車の賣買事件は私を大震災の危難から救つた、奇しき因縁を持つことゝなつた。當時は夏期休暇中ではあるが、私は毎日學校へ出勤し、午前十一時頃になると、辨天橋畔の銀行集會所へ行き、地下室の球技場へ入り、二三ゲームの後、二階の食堂にて晝食することが例であつた。所が前日東京にて購入の自動車を引取る手續をするため、會計主任の大山君と相談を済ました。それから集會所へ行つても、球を突く時間もなからうと思ひ、教務課をのぞいて見た。

飯塚、横地の兩君等數人が雜談をして居るので、私もなま入をした。恰も政變があつて、山本權兵衛内閣が成立せんとする噂の最中であつたから、話が自然政局論に花を咲かして居たが、卒然として彼の大震災が起つた。

若し私が平常通りの行動を取つて居たならば、生死は兎に角、集會所の地下室に埋められたことだけは確かであらう。若しあの地震が今二、三十分も遅れて、集會所にての食事中であつたなら、多數の銀行家や實業家と共に、私も如何なる運命に遭遇したるか知れなかつたのであつた。集會所は赤煉瓦を單に積み重ねた脆弱な建築物であつたため、一たまりもなく崩潰して多數の死傷者を出した。人間の運命と云ふものは實に奇妙なものである。この大地震の午前中に、家具家財を自動車に満載して、態々横濱へ移轉して來た私の友人もあつて、丸燒けの災に逢つた。私などは先づ幸運であつた。震災後暫くの間このビュックの自動車を横濱へ持ち來ることが困難であつたので、文部省が使用して居たが、間もなく學校に取り寄せた。大地震の跡とて、道路は極端に悪く、自動車の故障も頻々で、堪へられなくなつたので賣り拂つた。その後左右田銀行が、僅か半年程使用したビュックを買ひ入れた。運轉手であつた上野三郎君も、

この自動車と共に學校の用人となつた。

それより私と上野君とは行く處影と形の如く相つき纏つた。屢々東京へも往復したが、その度毎に東京驛又は新橋附近の一品食堂で晝食して、暫くの間世間話をするのが一つの樂であつた。

大正十五年の秋に至り、今上陛下が御大患におかゝりになり、續いて崩御遊ばされた。御通夜の奉仕から、御大葬に至るまで、屢々宮中へ參入したことは、私も上野君も共に感銘深きものが残つて居る。

處が昭和三年突然横濱市に、自動車運轉手疑獄が勃發して世間を騒がした。瞬く間にこの疑獄が擴大して、縣廳、市役所、裁判所、高等商業等、あらゆる官廳の運轉手連中は續々と拘留せられた。問題は彼等運轉手は、使用のガソリンを呑んだと云ふことで、ガソリン疑獄とも云はれたのであつた。その當時大小の疑獄が各所に起り、世道人心のため、人をして顰蹙せしむるものがあつた。

ガソリン疑獄の唯一の例外は我々の高工で、獨り上野君の名譽であるのみならず、我學校の名譽としてどれ丈け嬉しかつたか、想像してもらひたい。

この年の十一月に今上陛下の御即位の御大典が京都に於て舉行され、私もお召の光榮に浴し參列した。この御盛儀に自動車と共に、上野君も京都まで行つたことは、疑獄に關係なかつた我々としては氣分も清々として樂しかつた。

御大典も目出度終了し、十數日の京都滞在の後、東歸することゝなつた。往く時には、自動車は鐵道に托して輸送したが、歸りには東海道五十三次を、自動車膝栗毛の又と得難き機會と思ひ、決行することゝした。同乗者は庶務主任の小林長之助君で、十一月の或日の午後京都河原町の旅館を出立した。日程もなければ計畫もない、至つて氣樂で呑氣な旅行であつた。途中石山寺に立寄り秋の景色を賞し、瀬多のから橋を渡り、近江路を疾走し、日暮れて彦根に着し一泊した。

宿は東洋麻糸會社（現在の東洋纖維）の彦根工場の御世話であつた。彦根へ入る手前から道

に迷ひ、豫定より一時間も遅れた。翌日同所を出發し、關ヶ原の古戦場を見物し、同所にて晝食した。柿の季節であつたから、富有柿の名所大垣では柿を賣る店頭毎に車を停めて、名物の柿を購めたが、思ふ様な逸品が見當らなかつたことが大失望であつた。

日將に暮れなんとして名古屋に入つた。名古屋は屢々往來し又將來もその機會があることを思ひ岡崎迄強行した。名古屋岡崎間の道路は、東海道中での最惡路で、且つ日が暮れたため、かなりの苦痛であつた。第三日目の朝岡崎を出立したが、この日は最も困難の日であつた。即ち籠坂峠と小夜の中山は二大關所であつた。小夜の中山へ入る道傍に、大きな警察署からの立札があつて、自動車の通過は危險であるから、海岸の途を取るべしとの揭示があつた。其處で我々は車を停めて思案した。傳説に又和歌に名高き、小夜の中山を越へて、夜泣石を見なければ、折角東海道の五十三次を、自動車でドライブしたとしても、心残りに堪へない事である。兎に角誰れか土地の人に詳細を聞くより外はないので探して見た。幸にして附近にトラックの運轉手を見出し、この男に尋ねた。處が彼は我々の自動車を前後左右から検査して見て、この車なら多分通過可能と判斷してくれたので、勇躍して途を中山へ取つた。人家もなければ、人

通りも全くない、この淋しき山坂を登り登りして居る内に、急カーブの一角に到着して、其處で車が停止した。難關は此處じやと直覺せられた。一同車から降りて詳細にそのカーブを検討して見たが、道路が自動車のタイヤだけはばが廣ければ通行し得るにと、嘆息せざるを得なかつた。進退全く窮した。小林君と私が二人にて車體の脱路を支へ、上野君が頻りに爆聲を發しつつ努力したが、容易に前進が出来ない。數寸を間違へてタイヤが道路外に逸すれば、萬事が終りであるので、我々三人では到底如何ともすることが出来ないかに見えた。

愈々脱路すれば里まで引返して、數人の人夫を備ひ來りて引上げ、元の道を逆戻りするまでであると覺悟して、屈せず撓まず、細心の注意を拂ひつつ、一休み二休み、十分、二十分と努力を續けて居るうちに、やつとの事で難關を突破して、歡聲を上げた。今一つの難關に出會つたが、これは左程の難儀もせずして通過し、左までに好奇心を馳せた名物の小夜の中山夜泣石を見物した。夜泣石の傍に掛茶屋があつて、其處で一休みして下山した。

それから暫くして安倍川を渡り、名物の安倍川餅屋が幾軒もあるので、やつと本家を探しあて試食した。それから静岡市を過ぎ、焼津に入つたときは、暮色蒼然として至り、軒毎に燈火

を見る頃となつたが、夜道を吉原町まで辿りつき一泊した。田舎町のこの小さな宿で、當夜新婚披露會があつて、我々を喜ばした。

第四日目の日は、横濱まであと僅か半日の行程であるから、かなり朝寝坊をして、ゆつくり同所を出發し、箱根八里の秋色を觀賞しつゝ、小田原まで下つて晝食し、午後二時過ぎ校庭に歸着した。急行列車や、飛行機の世の中で、東海道の五十三次を、四日間も費しての閑かなる旅行は、又となき機會であつたと同時に又忘れ難き我々三人一生の記念でもある。

登極、大儀、擧^ゲニ舊^レ京^ニ。 滿都^ニ拊^{シテ}舞^グ仰^ニ休^ミ明^シ。
昭和、冠帶、悉^ハ朝^グ集^ス。 三^ハ十^ニ六^ニ峰^ニ雲^ニ作^スレ^テ縷^ヲ。

登極の大儀は舊京に擧けられ

滿都拊舞して休明を仰ぐ

昭和の冠帶は悉く朝集す

三十六峰雲は縷を作す

聖壽萬歳の御染筆

論語の中に次の文句がある。子貢欲去告朔之餼羊。子曰賜也爾愛其羊。我愛其禮。

孔子の高弟の一人である子貢は、或時告朔の餼羊を廢せんとして、孔子にその意見を伺つた。中國の古代では毎月の朔日に祖先の靈前に丸蒸しの羊を供へ、先月も一族無事で暮らしました。今月も又祖先の加護を乞ふとの意で、告朔の儀禮が恒例となつて居つたものである。子貢は孔子門下の中でも、利財に長じ裕福な人であつたので、告朔の祭りは虚禮で、毎月一頭の羊を消費することは、甚だ不經濟な事と考へて質問をしたものと見える。孔子は賜也しや（子貢の呼名）汝はその羊が大切だと思ふか、我は禮が大切であると思ふのである。今の世の中は道義頽廢して、禮の精神が失はれ、虚禮の行はれるのは歎くべきであるが、せめて虚禮でも残して置けば、何時かは聖人が世に出て、盛儀が復古するであらうから、我はお前の意見に同意する

ことは出来ない」と答へた。我國の日常道德は儒教に依つて、支配せられて居つたと考へても、差支がないであらう。従つて我國の上下を通じて虚禮の多きことは何人にも認め得られるであらう。

嘗て我國の各學校は、大學より小學校に至るまで、御眞影を奉戴し、教育勅語の下賜を受け、大祭祀日に於て、嚴肅なる儀式を舉行するを以て恒例として居た。私は之を以てかの告朔の虚禮と必ずしも同一視するものではありません。御眞影の拜賀と、教育勅語捧讀の儀式は、忠君愛國教育に大なる影響を與へて居たことを深く信じて居ります。

長い歲月の間には、御眞影又勅語謄本の天災又火災等の危難に直面して、身命をなげうつた奇特な教育家もあり、一方又他人を排斥したり、怨を報ずるために、御眞影や勅語を利用した言語同斷の惡人もあつたりした。私の長い學校生活に色々な見聞をしたものであつた。大禮服や、禮服で威儀を正した、校長先生の式場に於ける平凡な忠君愛國論は、心ある學生をして折角の儀禮を、無意義ならしむるものもなきにしもあらずである。校長先生たること、又難しい

かなと、私を痛感せしめる。

我々の學校は小學や、中學ではない。祝祭日の眞の精神を活かす、何等か他の方法を採るべきであるとして、先づ祝祭日に儀式舉行を行はないこととした。教育勅語は既に煥發せられたものであるから、更めて宮内省から下附を仰ぐ必要がなからうと考へて、名書家月出東山氏に托し淨書せしめ、之を美裝して所藏した。

御眞影に對しては、私は大に苦慮した末考へ付いた案は、必要な場合に、講堂に聖壽萬歳と題する大扁額を掲ぐることであつた。而してその揮毫は唯一の元老西園寺公爵の外なしと考へ、公爵に最も近接ある南弘氏を訪問して、その一件を依頼した。南氏は公爵は老齡でその上に手がふるえるので、大字の揮毫は絶對に望み得ないとの事で斷われた。

思案を續けたが良い智慧も出なかつた。端なくも或日某大寺院で、久邇宮殿下の揮毫を拜見したことがあつた。扁額の御署名を拜するや、腦底を過ぎた直感は、聖壽萬歳は殿下に限る、他の何人も問題ではない、特に殿下は皇后陛下の御父君であらせ給ふのである。殿下の御染筆

を得ることは、無上の光榮であると、私は勇み立つた。しかし能く考へて見ると、これは甚だ恐縮の事でもあり、又如何なるお叱りを蒙るかも知れないと思ふと、氣がひけたり、又躊躇もした。孔子は嘗て吾終日食はず、終夜寝ねずして以て思ふも益なし、學ぶに若かず、と述懐して居る。學ぶに若かずでない、當つて見るに若かずと、覺悟をきめて東京麻布の久邇宮邦彦王殿下の御殿に伺候した。山田宮家事務官が應接せられたので、私は横濱高工にまだ御眞影を奉戴し居らない理由を詳細に開陳し、殿下より聖壽萬歳の御染筆を頂戴し得れば無上の光榮であると謹んでお願いした。何れ何等かの御沙汰を待つことゝして歸つたが、若干の日を経て、御召があつたので參殿した處、殿下は學校へ對しては、御揮毫は出來ない。それは新例を作るからである。併し宮家に深い御關係のある、然るべき人を介して出願せよとの事務官の注意である。其處で早速山田事務官の指圖にて、東郷房太郎大將が好適の介者であることを教へてくれた。幸にも東郷大將はかつて武德會會長として、我々の學校へ來られたことがあつた。その際私の所望で、柔劍道場に「文武不岐」の揮毫を残された。又大將の雅號栗洲の由來の説明を聞き、大將の面前で、私の雅號天羊を、煙洲に改めた。多少の因縁があるので私は一層の喜びを感じ

た。斯くして萬事が順調に進行し、更に宮家からの御呼出しを受け參殿した所、用紙を持參せよとの事であつた。早速虎の門の晚翠軒にて最大の統二枚を購入して持參すると、山田事務官は、殿下は只今熱海に御滞在の中なれば、追つて御沙汰のあるまで待てとのことであつた。それから一ヶ月もたゝぬ間に御沙汰に接し參殿して、御染筆を頂戴した。その節揮毫の文字が、非常に大字であつたため、殿下は中々の御骨折であつたとの殿下の御言葉が、山田事務官より達せられた。

殿下の聖壽萬歳は、實に見事な御達筆で、墨痕淋漓、私をして驚喜せしめ、又有難さに感激せしめた。猶これがため幾度となく御殿に伺候し、その都度結構なる御菓子を頂戴し、實に御鄭重なる御取扱には恐縮感激した。

聖壽萬歳の御染筆は入念に表装を施し、堂々たる扁額に仕上げた。又別に長持を作り、之に納め、長持には棹をつけ、萬一危急の際には、二人にてかつぎ、簡単に避難し得る用意をして置いた。

聖壽萬歳の扁額は我校の卒業式と天長節祝賀音楽會、その他の盛典には必ず講堂の正面に掲げられた。更に壇上には名匠宮川香山作の青磁の巨大なる花瓶に生花が盛られた。この花瓶は東京市長としての後藤新平伯より、英國皇太子殿下に奉呈したものと同一のものであつた。右側に控へる一隊の學生管絃樂部員と、燦爛として相映する光景は、我校自由啓發主義教育の精神と、弘陵學徒の意氣を象徴し、不言の感激であつた。

大君の御代ことほぎて人もわれも

日毎々々に仰ぎまつらむ

ゲーテの抑損と知足

詩人としてのゲーテの名は、誰れでも知つて居るが、政治家としてのゲーテは、餘り語られて居らない。ゲーテは千七百四十九年に生れたのであるから、今年は丁度二百年目になる。死んだのが千八百三十二年であるから、今年は百十七年目である。我國では天保年間の末期位で、私の父の生れた頃に當る。して見れば餘り古い昔でもない。

ゲーテの大學卒業の學位は法學士であつた。二十六歳で封建獨逸のワイマア國に招かれて官吏となり、幾年も立たぬ間に、ワイマア國の閣僚となり、續いて内閣の首班即ち宰相となつた。國主カール・アウグストのため、忠實なる輔弼の責務を盡くし、終生君臣水魚の交りを全ふした。カール・アウグストをして、獨逸諸侯中の名君たらしめ、ワイマアの一小都市をして、獨逸文化の中心たらしめしことは、一つにゲーテの功績と云はなければならぬ。

ゲーテが藩主アウグストの壽を、祝福する詩章中に、君主の最高の道德として、抑損と、知足の二つを擧げて居ることは、特に私の注意を惹起するものである。抑損とは自ら抑へて放縱なることをしないことであり、知足とは分限を守り、それに安んずるので、所謂知足安分の意である。なる程諸侯であれ、又帝王であれ、大小を問はず、一國を治むる君主は、抑損と知足を心得て居るなら、大過なくして治國平天下の實を擧げ得るであらう。

現代は封建の體制を遠く後に殘し去つた。封建はおろか、立憲君主制までも殆んど消滅せしめた。ゲーテの君主最高の二大道德も、持つて行き所がなくなつた。しかしこの二大道德は、君主の專賣的道德であるとは、ゲーテは云はなかつた。君主も人間であり、臣民も人間である以上は、普通市民も抑損と知足の道德はあながち無用のものでもなからう。それには別段ゲーテも異議がなからう。

しかし現代に於て、抑損とか知足とかと云ふ道德は存在して居るであらうか。又その様なものは、道德であり得るであらうかとさへ、疑われるのである。それがたとへ道德と見られて居

るとしても、至つて影の薄いもので、迂遠な人間社會の通用語であるに過ぎないかも知れない。

今の世の中では、正直者は馬鹿を見るとか、自己を抑へて居るものは、無能者と見られ、その様な意味での正直者と無能者は嘲笑の目標となることがある。何等かの世才にたけたものは、自己を抑へることを知らず、放縱なる行動を取り、彼等自身が利得を收め得れば他を顧みるの遑がない。ために彼等の行爲は、他に損害を與へ、不平等の結果を生み、社會に害毒を流すのみである。分限に安んずることを知らず、所謂吳を得て蜀を望み、自己主義の存在する限り、同様害毒を社會に及ぼすこととなるであらう。昔孟子は次の様に論じて居る。

萬乘之國弑_レ其君_二者。必千乘之家。千乘之國弑_レ其君_二者。必百乘之家。萬取_レ千焉。千_レ取百焉。不_レ爲_レ不_レ多矣。苟爲_レ後_レ義而先_レ利。不_レ奪_レ不_レ饜。上下交征_レ利。而國危矣。

と。

即ち言葉を變へて云へば、臣下の最高の祿は、君主の十分の一に當るので、決して少くはない。然るに義を思はず、利のみを先きに考へるから、君主を殺害して、取つて代はる様になる

のである。奪はなければ置くことを、即ち足ること知らなければ、いつでも國は危険なものであると戒しめて居る。

かくの如く自己の利益の立場のみを見て、他を顧みないのは、詮じ詰めて見ると、思ひやりのないことと歸着するであらう。人間社會に於て戦争程思ひやりのないものはない。總てを舉げて味方の利を計り敵の不利をねらうのである。古への聖賢は戦争を以て人類最大の罪惡として、戦争を忌避したことは、實に無理ならぬことである。

今日我々は憲法により、戦争をしないこととして居る。従つて武器を持たない。しかし武器に依らない戦争は不斷に行はれて居る。國家の機構團體に於ても、私營の機構團體に於ても、至る處各自の利益を主張して鬭争して居る。戦ふ武器は、ストライキと云ふ原子爆彈である。その他社會の各方面に罪惡が、浸潤散布して居る。戦時中から闇とか、横流しとか、横領とか、詐偽とか、隠匿物資とか、様々な利慾の目標物が出來て、敗戦後の社會を一層不淨不安ならしめて居る。

抑損と知足の道徳は、社會から消へ失せた。お互各個人の間にも、各機構團體の間にも、思ひやりと云ふものは消へ失せた。治者と被治者の間に、幹部と従業員の間にお互に思ひやりの觀念を失つた。兩者の間にお互に地位を更へて考へ得る餘裕がなくなつた。孟子の所謂上下ともに利をとつて國危しと云ふ現場である。

近世ゲーテの抑損と知足の道徳は、東洋古代の孔孟の儒學思想と、全く一致するかの感じがせられる。猶老莊とも一脈相通するものがある。ゲーテを今の世に呼び起し、抑損と知見の精神を、小説に劇作に詩に筆を取らしめたなら、世道人心を淨化し、平和の貢獻に歸與することあらんと、私は空想するのである。たゞし現代相を掘り下けて行くと、平和はその様なカテゴリーのものでなく、より深刻な魔相を呈して居るのに、驚き且つ憂へるのである。

煙

福

三十餘年間一日たりとも葉巻に親しまぬと云ふ日がなかつた。處が昭和十七年十一月八日に最後の一本を吸ひ盡してしまつた。當時一般に煙草は非常に缺乏して居り、特に葉巻を購入する事は一層困難であつた。

翌九日孤影悄然として家を出て、東京へ行つた。日本俱樂部の事務室に入つて暫らく談話をしてゐると、思ひ出した様に書記長の大津君が一本の葉巻を机の抽斗から取り出して私にくれた。長い歲月知己や友人から、どれだけ多くの葉巻を恵まれたか知れないが、僅か一本ではあるが、この一本程、深き印象を私に與へたものは無かつた。事實これに依つて、私は葉巻生活を斷絶することなく、更に一日の餘命をつなぎ得たので、その由來を陳述して大津君に感謝の意を表したのであつた。

翌十日は何としても、最後の日と諦めざるより外がなかつた。恰もその夜は情報班員兩三人、例により六ツ川夜話の口述の筆記に來宅した。十幾年に亘る、夜話の度毎に葉卷の紫煙をあげないことはなかつたが、今夕初めて葉卷に缺乏したとて、序ながら前日大津君の出來事などを物語つた。口授半ばにして、所用あつて席を立ち、臺所の前を過ぎると、家人が私を呼び止めて、今日或る會合で、野澤屋の高岡社長が富山校長に面會し舶來の上等葉卷コロナ一本を校長に托し贈られたとて、私に手渡した。私は何たる天祐かと驚喜せざるを得なかつた。早速火を點じ、班員諸君に對し葉卷に纏綿する私の艶福に似て非なる煙福を語らざるを得なかつた。

その翌早朝天津から知人の栗原喜賢君が來訪して、この頃は天津でも上等の葉卷が缺乏して居るので、佛租界に人を馳せて、漸く求め得たとて、舶來の葉卷一箱を贈られた。私は何たる煙福かと喜んで之を受け、更に前日の煙福を物語つて、若しこの一箱が一日遅れたならば、私は三十餘年間の葉卷の連續が中絶せられ、光榮ある葉卷生活に暗影を投ずる事から救はれたとて栗原君に平身低頭感謝の意を表した。

先づこれにて一日一本づゝに節煙すれば、二十五日間は大丈夫と、一大安心を私に與へたのであつた。それから幾日かを經て、或る日の正午、ニューヨークにてホテルの野村社長と食事と共にした。計らずも隣席に安達謙藏翁が居られた。翁は私の著書入愚亭獨嘯中の煙草の一節を讀んで面白く感じたとして、翁所藏の葉巻をやると約せられ、それから數日にして、舶來の葉巻二箱を送られた。その様な恵まれた葉巻生活が今日までも、打ち續いて煙福の日を送つて居ることは有難きことである。

今年になつて煙草の代價が、驚異的の暴騰をした。時局の然らしむる所で、不平も不満も一切ない。明治時代に一本五錢であつた最下等の葉巻がだん／＼に騰貴して、三十四錢になつて居た。即ち一箱八圓五十錢である。それでも尙配給があつて、店頭に現はれたならば、購入する事を見逃さなかつたのである。それが今日では、一本八十錢、一箱二十圓になつた。この割で行けば最上等のコロナ、コロナは優に千圓以上である。かく騰貴しては、最早私の經濟としては、如何ともする事が出来ない。未練もなければ、愛着もない。斷然諦らめるより外がない。

紙巻に轉進しやうか、或は旗を巻いて退却しやうか、岐路に迷つてゐる所である。

煙草に關する私の感想は昭和十五年に“私と煙草”と題して高工出身者の機關雜誌“橫濱工業會誌”に三回に連續して掲載した事がある。今にして之を再讀して見ると、まだ／＼書き残されたる事が多分にある感じがせられる。然し今日の様な切迫した時勢となつては、更に之に添加補遺する勇氣がない。

(昭和十八年三月)

噫！
落
第

縱横禮樂三千字

獨對丹墀日未斜

これは得意な試験問題を打ちあて、三千字の論策を縱横に書きまくり、もう夕方かなと、試

試験場を出て見ると、何んだまだ晝過ぎかと、意氣揚々たる受験生の述懐である。かくては試験といふものも、何等苦でない實に愉快の事である。

中國は試験の本場であると共に、又カンニングの本場でもあることは、各種の書物に詳しく記載されてゐる。青雲の志ある者は、何人も試験即ち科擧に悩まされたもので、我が國に於ては明治初年に學制が發布され、それ以來學生に試験は附き物になつた。

試験制度は中國から來たか、西洋から輸入せられたか、その詮議は別として、青年學徒が試験に悩まされる事は、中國の科擧を思ひ出させる事は多い。これも所謂同種同文から來る臭氣に違ひない。

我が國では夙に試験地獄と言ふ言葉が出來てゐる。畢竟試験と言へば當人は勿論、親兄弟も親戚故舊もことごとく悩まされないものはない苦痛で、實にこれは社會的の、又一般的の地獄である。特に毎年三月四月の花の季節に、暗い陰氣な影を多くの家庭になげかけるのである。

この頃特に問題となつたのは、全國高等學校に於ける落第生の多かつた事で、その筆頭有福

岡高校で、七十幾名の多量の落第生を出した事である。これに對して種々なる世評が湧き起つて教師を非難する者もあれば、學生を非難する者もある。又同時に色々の意見も出て來た。

試験制度がある以上は落第も出来るのは相違ない。百代の詩聖杜甫も試験に落第した。しか
語る私も京都同志社の入學試験の落第生であつた。落第必ずしも悲觀すべきものでない。畢竟
するに學問の試験に重點を置き過ぎるからであらう。廣く考へて見れば人間一生は試験場で暮
らすのである。

我が横濱高工では創立以來二十幾年間、無試験、無採點、随つて又落第生なしに押通してを
るが、出身者が、他校に比して、遜色のあることを聞いてはをらない。一年落第さして、原級
に止め置いても、著しき進歩發展をして、進級するものではない。こう云ふ連中は、いつでも
席末を汚す程度である事は、私の五十年間に於ける高等學校教師としての經驗である。同僚の
教師の中には、すこし位落第生を、自分の受持學科から出さないと、教師の威嚴に關すると、
思つてをつた者も、絶無ではなかつたようである。兎に角學校と言ふものは試験制度で難攻不

落の武裝をした城郭であるかの感を抱かしめて居る。教師は辨慶の七つ道具で鎧ひ、教壇に立つて、諄々として説き、學生はもく／＼として筆記する。教師も學生も學校に於ける努力の重點は、教育ではなく、試験である。學年試験が終ると顔色憔悴形容枯槁するものも少からずである。この様にして試験重點の教育を受けて來た人々が、次から次へと、教師になり、行政官、父兄になる以上、如何に改善を計つても教育の面目を一新する事は容易の事であるまい。

問題になつた落第生七十幾名といふものについて、各方面の論議者の内で最も我々の注目を引くものは、安倍一高校長の談話であらう。

新聞紙上に掲載せられてゐるのを見ると、次の様なものである。

「全國的な事實は知らないが今年のみ特に多いといふ事はないと思ふ。一高でも七十名出したが特に増加したわけではない。唯その中半分以上が休學者で身體を傷ねて休學する者が多くなつた事は事實だ。又學制改革が生徒に不安を與へた事も事實で、一部に學問などは二の次だ、ぼんやりしてゐても出してゐるといつた時局利用といふか、火事場泥棒的な氣持を持

つ者が生じたとしても否定出来ない。こうした學問輕視の傾向を強制するため學校全體の事を考へて正しく嚴しい態度に出られた校長もあつたと想像する。そう言ふ精神の者に對しては止むを得ないと思ふ。云々」

これだけで見ると、落第の責任は、専ら學生生徒の負ふべきもので教育者の責任では無い、學校はその責任を全うせしめるために、落第といふ武器を持つて、これに臨み、これを鞭撻叱咤するのであると解するより外がない。

學問を輕視してはならない。随つて落第生を作つてこの傾向を防禦する。斯くなつては、試練は教育の重點になつてをるものと考へられてならないのである。

少數者を賞して、多數のものを獎勵する、又少數者を罰して、多數のものを懲らしむることは、一般社會を律する政治であるかも知れないが、これがはたして學校教育の要諦であるであらうか。總てを眞に我が子と考へ、總てを伸の子として取り扱ふならば、何んで二三者を特に賞し、又二三者を罰し得るかである。

學校はその人の一生涯に要する總ての知識を授けて、博識強記の人才として世界に送り出す任務を持つてをるのであらうか。學校生活は、長い實社會に處する準備の短かい期間のみである。人間の活動する大部分は實社會である。學校で學び得る學問は、たいした分量ではなからう。それが多くの人にとつては、大部分は忘れてしまはれるものではなからうか。

然しながら、若し學校で知識の大切な事について自覺することを得たならば、その人は一生知識慾といふものを益々向上せしむるものであらう。これによつて得られる學問知識といふものは、學生中に得た數倍又數十倍に値するものがあるであらう。

さらば學校教育といふものは落第生を作つてまで學問を重視することを、懲戒的に獎勵すべきではなからう。明朗にして且豁達に知識の獲得に精進する、その學風を振氣するといふことは、むしろ學校當面の急務ではなからうか。試験なしに、落第生なしに學校教育をほどこす道に工夫邁進することは、教育の一大改善である。落第生を作ると云ふことは、慥に教育の邪道であると私は斷ずる。尙文部當局談として、「落第も仕方がない」と公然發表せられたのを見

て、私は我が國教育の精神的低調と當局の精神的勇氣の缺如を嘆ずるのである。

(昭和一八年四月一四日)

失　　ひ　　た　　る　　も　　の

戦争のため又特に敗けたために、國家として失つたものは莫大である。領土がなくなり、兵備もなくなつた。その他なくなつたものは擧げて數へられない。個人としては家を失ひ、家財を失ひ、父や子や夫をなくしたものは幾百萬にも上るであらう。我々の學校は校舍も設備も何一つ戦災に罹らなかつたことは、何よりの仕合せであつたが、それでも物質的又精神的に失つたものは決して少くない。

高工時報は何を失つたか。先づ第一に定期の發行を失つて居る。毎月二回の發行は太陽が毎日東天に昇ると同じ様に間違ひがなかつた。それが二ヶ月か三ヶ月目に一回と云ふ不定期發行

となつた。紙が不足の爲とか印刷が不如意とかが原因であるとして居る。それが果して全部であるであらうか。部員の不熱心が紙と印刷とに、何の交渉もないであらうか。

今や國は破れ、家は傾き、産業は振はず、紙幣は落葉の如く、生活日に困窮し、上下交々利を争ひ、國を舉げてなれば暴民と化したる狀勢を呈して居る。全く十年の長期戦争と敗戦に國民は疲れはてたる姿である。この時に當り誰れがこの國民を鼓舞慰藉するの任に當るべきやである。私は人間味の豊かな情熱の詩人や歌人や文士の顯はれ來ることを旱天の慈雨の思ひで待望するのである。特に感激性に富む純真なる青年學徒の蹶起は、國民に對する偉大なる慰藉となるであらう。

高工時報は我校とその周圍に幾許の慰藉を與へて居るか、幾何の鼓舞を與へて居るかは問題である。時報社自體は先づ感激性を失つたのでなからうか。戦争程人間に感激性を與ふるものはなからう。特に純情なる青年學徒に於て然りである。十年の長期戦争はあらゆる感激を青年學徒から搾り盡されたとも考へられる。かくと考へて見れば時報社に残された感激は幾許ぞ、

之を責むるのは無理であるかも知れない。

戦争以前の時報とその後の時報を比較すると其處に可なり大なる相違があるかの様に見へる。今日の時報は全く無味乾燥である。あれでは學校の活動も内容も抱負も希望も分らない。讀んでも讀まなくても異りはあるまい。昔の時報には笑ふこともあれば憤慨することもある。滑稽もあれば、諷刺もあつた。特にユーモアたつぷりと云ふ處に他校の學生新聞に伍してたしかに異色があつた。

今日と雖も教職員學生間にお互に大笑したり滑稽を演じたり、諧謔を交へたりユーモアを飛ばしたりすることは昔と變りはないであらう。併しこれは個人間の出來事で、學校の笑でもなければ滑稽諧謔ユーモアではない。之等は學校から失はれた。即ち時報から消へ去つた。時報は沈黙した。恐縮した、服従した、退嬰した、自由を失つたと云ふより外はない。終戦以來既に三年有餘を経過したが時報は依然として戰時強制せられた態度を今猶從順に守りつゞけて居る。

時報社の同人よ、失ひたるものを取り戻せ、之等のものは決して小なるものでない。國民と

しても同様である。我々國民は國際的に大なる笑聲を諧謔をユーモアを飛ばさなければならない。それには請ふ槐より始めよである。以上は私の一家言である昨非今是か昨是今非か敢て讀者の裁斷に待つゝあるのみである。

(昭和二十三年十月)

ウインストン・チャーチルとネヴィル・チェンバレン

ウインストン・チャーチルは現代世界に於ける大政治家であり又軍人である。世界第一次戦争の時には彼の活躍は著名なものであつた。彼はその以前玖馬戦争、印度戦役、スーダン戦役、特に南阿戦争では捕虜となり、逃亡して再び戦役に従事する等實に數奇な壯年時代を過した。世界第一次戦争後彼の首領たる自由黨は没落して、彼の存在は英國に於ても昔の面影がなかつた。彼は田園に引籠り歐洲各國の新聞紙に筆を取り、生活費を求め、國內識者の同志と氣脈を通じ、専ら大戰後の獨乙の狀勢を研究し、ヒットラーの非謀に備へた。それがため佛國の政治

家とも往來し、又獨乙人にして反ヒットラー主義者とも連絡した。凡ゆる手段を盡して獨乙を研究し、獨乙がヴェルサイユ條約を無視して、再軍備特に空軍の急激なる發展と準備に對し細心の注意を拂ひ、その研究の結果を政府に建言し、英國が虚に乗ぜられ、臍をかむの愚をなさざる様絶へず苦言した。時の政府は彼の反對黨であり首相はネヴィル・チェンバレンであつた。

英國の輿論は多數黨を作り政治を支配する。チャーチルは輿論には黙従するが、自信は決してまけない。輿論はチャーチルの態度は平和に有害なりとして、彼と彼の自由黨を支持しなかつた。併しながら彼は政府の平和主義は、徒らに獨乙の輕侮を買ひ、結局平和をもたらし得ず、戰爭に導くものとして猛烈に反對した。さりとて彼は倒閣運動や陰謀に奔らず、研究した事實を擧げて、獨乙を警戒することにこれ勤めた。在野黨の唯一の目標が倒閣であると云ふ感じを與へないことは、英國民の練達した教養と私は敬服せざるを得ないのである。

當時次から次へと、條約を無視して、獨乙政府の威力を増大する脅威に堪へかねて、平和主義の首相チェンバレンは、三度まで獨乙へ飛行機を飛ばしヒットラーと會談した、所謂ミュン

ヘン會議である。會議は私共の豫想に反して、著しき英國側の讓歩であつた。それでも戦争に訴へず、平和に時局を拾收したとして英國の輿論は寧ろ喜んだ。

當時私は戰勝國である英國の首相が、敗戰國である獨乙へ三度までも出かけて、會談することとは、英國の國威のため惜んだものであつた。恐らく世界も同様であつたであらう。會議が無事に終了し英首相が大陸を離るゝに際し次の意味のことを放送した。

兎に角會議は戦争に導かず、平和に事を收めた事は實に喜ぶべきことである。戦争ほど慘禍を人類に與へるものはない。しかるが故に戦争は凡ての手段を盡くして避くべきである。しかし或獨裁者が他國民の自由と權利を奪ふため、戦争に訴へるが如きことが起るならば、それは實に悲むべきことである。人權と自由なくしては人類として最早生きる甲斐がない。その時には何を置いてゐても我々は戦はなければならないと述べた。

チェンバレン首相の肝血をそそいだ會談もヒットラーには全くうわの空であつた。第二次世界戦争は勃發した。ヒットラーはポーランドへ侵入した。これを迎へて戦争を宣言したのは平

和に執着したチェンバレンその人であつた。あれ程までに苦勞しても平和をもたらし得ず、戰爭に立ち入つたことは、彼に取つては如何にも残念であつたと察せざるを得ないのである。彼の爲父ヨセフは私の大好きの政治家であつた。彼の兄であるオースチンも好きであつた。英國の政情に不案内な私はこの多人に對し、ネビルの評價を過少して居つたことに氣づき後悔せざるを得なかつた。

チャーチルの態度に對して私は大いに敬意を拂ひ教へられる處が多いが、同様の敬意をチェンバレン首相に對しても拂ひたい。昔から治にあつて亂を忘れずと云ふ格言があるが、この當人は英國に於てこの格言を現實せしめたもので、その背後をなす英國人は我々に大なる教訓を與へるものである。平和に汲々として國防を疎略にした英國は、初戰に於て大なる不利を蒙つた。チェンバレンは男らしく内閣をチャーチルに渡して、第二次世界戰爭に英國を勝利に終結せしめた。

今日世界各國民中には平和を祈念することネヴィル・チェンバレンの如き人が多數あるであらう。又一方には平和が破れることを恐れその準備に餘念なきチャーチルの如き人も多いことと思はれる。この二人の型の人類の存在すると云ふことは、畢竟するに世界の何所かにヒットラー型の人間が未だに存在して居ると云ふ暗示でなければならぬであらう。この三人の型の人間が世界に存在する限り眞の平和はもたらし得ない。我々世界人類は絶へず不安の状態に置かれる。現代の世界は大戦前の状態と比べて平和に關する限り少しも變化がないと稱しても不可ないであらう。しかし私共は決して失望しない。世界歴史の底には平和の流れが脈々として潜んで居る。百川綜合していつかは靜かな海に注ぐであらう。

(昭和二十四年十一月横濱工業會にて)

「藤原銀次郎回顧八十年」を讀みて

私の讀んだ名士の回顧録で「藤原銀次郎回顧八十年」と題する著書ほど私に感銘を與へたものはない。併し本書は藤原氏自身の筆に成つたものではない。本書著作のため某新聞記者が毎周二回一ヶ年間の長きに涉り藤原氏邸へ通ひ、八十年間の回顧談を聞き取り、その記事に就き藤原氏が克明に目を通し、更に新聞記者として十三年間氏と懇親の間柄である下田將美氏の考證と調査により、更に約半歳の努力を費し、この尨大なる回顧録が出来上つたものである。その多種多様な回顧録中の記事は、どのページにも貴重なる教訓と經驗が盛られ、一度び巻を繙けば、全く他事を忘れ時の移るを知らざらしむるものがある。此處には只私に最も感銘を與へた一、二の事柄にのみ局限する。

何と云つても藤原氏を大成せしめたものは、王子製紙株式會社である。王子製紙は政府の紙幣や公債證書用の紙を製造するため、初めて外國より輸入したる機械製紙の工場で三井財閥の資本に依つたものである。當時大藏省の官吏であつて、後の實業界の大御所となつた澁澤榮一氏が野に下つて社長となつた。澁澤氏の努力と日清戰爭の影響を経て王子製紙も一時に發展したが、その後或事情により澁澤氏は去り、その後會社は混亂狀態に陥り、容易に拾收し難きボロ會社に没落した。藤原氏は三井の他の部門から拔擢せられ、入社して整理の任に當らしめられることになつた。當時王子製紙は三井資本系であつたが業績不良のため、三井銀行からも、又三井物産からも、信用を失ひ全く相手にされなかつた。藤原氏は大に發憤して、三井のこの兩陣營に依存せず、獨力經營に肝血を注ぎ、苦心慘憺の結果終に王子製紙をして世界製紙界に重きをなさしめ、藤原氏をして製紙王と稱せらるるまでに至らしめた。かくなると三井の兩陣營から、頻りに王子製紙と取引を要請せらるに至りたるも、王子製紙のボロ會社時代には一顧をくれずして、現在王子が取組んで居る得意先を棄て、三井の兩陣營に鞍代へすることは、得意先への義理としても、又三井兩陣營への感情としても、藤原氏としては容易にその要求に應

ぜられなかつた。それがため藤原氏は三井全般に不評となり、その結果藤原氏排斥問題にまで立至らんとした。

或日三井同族の總元締である三井八郎右衛門氏より藤原氏は電話で呼び出された。藤原氏はその當時の雰囲気から考へて、用件は必定自分を王子製紙の社長を引退せしむる宣告であらうと、悲痛な覺悟をして三井同族の事務所へ出頭した。處が三井氏は秘書の有賀長文氏を同席せしめ、藤原氏を前にして、次の様に挨拶せられた。

「あなたは王子製紙を引受けられ大變な努力と心勞をされた。今日王子が立派に建直つたのは全くあなたのおかげだと思つてゐます。三井の金をつかつて自分の評判をよくすることはかり考へる人が多いのに、あなたは自分の評判を悪くしてまで王子をよくすることに努力してくれました。三井同族一同は深くあなたに感謝してゐます。これは甚だ輕少だが同族が御禮として差上たいので御受取り下さい」

とて水引のかゝつた立派な奉書包が渡された。意外のことに藤原氏はお禮の言葉も出ず、潜

然として涙を禁じ得なかつたと、さもあることゝ讀んでゐた私まで涙が出た。藤原氏の辭去に當り八郎右衛門氏は使用人に對する格式を破つて、藤原氏を戸口まで送つたのに對し、恐縮すると、たつた一言「もう喧嘩はよせよ」と述べてそのまゝ後へ引き返へした。

「人生感意氣。功名誰復論」人生意氣に感ず、功名誰かまた論ぜんやだ、藤原氏は心機一變した。過去の感情に何時までも執着すべきでない、それから三井銀行とも、物産とも取組んで王子製紙を益々發展せしめた。私は何も知らないが三井財閥の惣帥である丈け八郎右衛門氏は大なる器量の人であると感服せしむる。藤原氏は意氣に感じたとするれば、私は唐の太宗と魏徵を想起せざるを得ない。

私の狹隘なる生涯に於ても、藤原氏の心機一轉を思ひ出さしむるものが一再ならずあつた。私が學校を卒業して初めて仙臺の二高に奉職した。我々學校仲間には社交的範圍は至つて狭く、専ら同僚間の交際に限られて居つた。最も頻々に往復しつゝあつた一人の同僚は、會合の度毎に私が學校から至つて冷遇されて居ることを羅列して、抗議しないのは如何にも私は馬鹿であ

るかの様にしきりに煽動するのであつた。私は別に意に介しなかつたが、餘りにやられるので、ツイその氣になり、一夜學校長を訪問して直接待遇問題に付き陳情した。學校長中川元先生は私の顔を見て、「君でもその様なことを云ふか」と只一言された。君でもと云ふでは電光石火の如く、私の急所を衝かれた様な感がした。即座に私は自分の不心得を謝し辭去した。二高に五年愉快に勤務し中川校長から愛せられた。仙臺より廣島高等師範に移る時、私の待遇は各一級昇進して行くべき筈であつたが、轉任後間もなくその手續を了するとの當校長の申合せが、廣島の三年、其れから外國留學三年を終へてもそのまゝにして棄て置かれた。その中には三年移らずとか、十年同席を暖むとか、不過落後の合言葉もあるが、私は八年同席を暖めて不平の聲を發しなかつたのは、中川校長の痛棒が身に沁みたからである。藏前高工へ轉任して、初めて私としての伯樂手嶋精一先生に遭遇し遅れを取り戻した。職務を楽しめば、待遇などは考へる暇もない筈である。

大正八年横濱の富豪安部幸兵衛氏は公共事業のためにと百萬圓を縣へ托して死去した。百萬

圓は當時としては大金である。この資金を利用する提案が各方面より數十の多きに達し、何れも縣へ對して運動した。私はこの資金を以て工と商とを兼ねた中等學校を創立し、文部省の直轄として、横濱高工に附屬せしむる案を提出した。大勢は學校設立と決した見透しが付いたので、後事を市の二三の有力者に托し、二ヶ月間の豫定で中國旅行に出立した。出立後間もなく、青島滯在中に愈々學校創立に決した報を得て、大に安心した。歸朝して見ると神奈川縣會は、縣立商工實習學校として決議してゐたのに驚いた。縣當局は私の直轄學校と云ふ條件をあいまいにして百萬圓の資金を縣の自由采配にしたものであつた。私は斷乎として縣立を承知しなかつた。一方私は直轄學校として、文部省とも交渉済であるから、私の體面上からも承認出來なかつた。困つたのは縣の當局で、私が承諾しなければ、縣會へ對して辨明の辭がないからである。隨つて問題は私の不承知のため全く行きつまつた。或日私は櫻木町驛前の辨天橋を渡つて居ると、向ふから私の知らない人が立留まり、突然私に挨拶をして、私の顔を見ながら實習學校の新設は實に結構な事で、自分共は非常に喜んでゐる、何分宜しく頼むとの事であつた。第三者から見れば、實習學校の設立は、それ程一般市民に待望せられてゐるか、然るに自分の不承

知のため、市民に不安を與へることには氣が付かなかつた。設立は第一義だ、條理は第二義的のものだと、私は即座に路傍で心機一轉した。直ちに私は文部省へ馳せ參じ、時の次官南弘氏と局長山崎達之輔に面會して、縣立として一先づ受諾し、近き將來に於て直轄に移管する様、承認を受け、一方私の面目を立て問題を無事解決した。

藤原氏のあの回顧談を見て、事情も舞臺も大いに相違するが、何か其處に一脈の相通するものがあると、私は多大の感興に打たれた。

次に私に大なる教訓と考察を與へたのは、行政査察使時代の回顧記事であつた。政府は戦争が進行するに従ひ、益々軍需品生産の行き詰りを憂慮し、行政査察使の制度を設け、藤原氏はその査察使となり、軍需工場を調査して、國內は愚か、滿洲方面までも、七十歳の老齡を以て出張調査せられた。内地では釜石、室蘭の製鐵所から、名古屋の三菱航空機製作所、住友金屬、大同製鋼、中島飛行機、川南造船等非常に多數に上る工場を視察した。藤原査察使が一たびその工場へ入るや、忽ちにしてその工場の成績の上らぬ缺陷が指摘された。その急所を見るその

妙は神に入り、その生産澁滞の原因を摘發すること、眞に掌を指すが如く正確であつた。工場の幹部も従業社員も、全く査察使の前に平伏せざるを得なかつた。私は書中の一つ一つの事實を抜書するの餘白がないが、その活眼と熱意には驚かざるを得ない。

私は一生教育界に立籠り、會社の經營には毛頭經驗のないものであるが、藤原氏のこの書を讀んで見ると、その私でもボロ會社の一つ位整理したい氣分になる。事實藤原氏の眼中にはボロ會社と云ふものはないのではないかと思れる。これはボロ會社であつた王子製紙の三十年間の、苦心慘憺から來た尊き結晶に外ならないのである。藤原査察使の行動はその當時大なる衝動を生産業界に與へ、他の査察使と異なりたる何物かをもたらしたことは、全く王子製紙三十年より起因したものであらう。

ボロ會社には、藤原氏に依つて看破され得る、何等かの缺陷があるに相違ないと私は思ふ。その缺陷は又會社の従業社員の或一部には、必ず認識せられて居ると思ふ。しかしその中には何とかして補正せられるであらうから、何も自分を不評判にして、挺身その補正に乗り出すに

は及ぶまいと、誠意と勇氣を缺き、臭ひ物に蓋をして益々腐敗せしものが多いのではなからうか。我々三校の出身者にしてボロ會社を抱いて居るものは、是非この藤原銀次郎回顧八十年を一讀否再讀又精讀せられんことを私は希望する。藤原氏の精神で努力すれば、ボロ會社は忽ちにして一掃せられるであらう。

(昭和二十五年四月)

皇立自然科學研究所設立是々非々

昔から君主國に於ては、學問藝術の獎勵のため、王室關係の研究所なり、又何かの形で設備があつた。我國ではなくてはならない筈の、國柄であるにもかゝらず、今にその様なものはなかつた。その由來は我國では天皇を極端に神聖化し、皇室の奥深くに奉戴し、社會の事物に接觸あることは、天皇の尊嚴を汚濁するものとして、側近者の專横と、警戒の然らしむる所で、決して天皇の御趣旨ではなかつたであらうと、私は考へる。

維新以來、時勢は大變化した。天皇御自身は、宮中奥深くで、生物學の御研究に熱心せられた。天皇の時勢に對する思想は、側近者よりも、餘程進歩的であつたことが、考へられるのである。

帝國大學が、教授の停年制を實行して以來、幾多の有爲の教授は、大學の研究室から離れ去つた。停年は六十歳である。六十歳と云へば、まだ研究に堪へられない頽齡と云ふ程ではなからう。中谷博士の「花水木」と云ふ書中で、アメリカの著名なる多くの學者の消息が傳へられて居る。八十歳臺は愚か、九十歳を超へて、猶矍鑠として學界に活躍して居るものがある。アメリカとは異なり、我國民の平均壽命は短命なりと雖も六十歳で退隱の止むなきことは、實に惜しむべき次第である。これもアメリカと異なり、公職退隱後、研究を繼續する機關と設備のなき我國に於ては、一層憂慮すべき事態であると云はねばならない。

我皇室は、皇立自然科學研究所を設立せられ、以上停年退職者にして、特にその前途を惜まれる教授連を入所せしめ、皇室の優渥なる御待遇に浴し、生活の安定の下に、自由に研究を遂ぐることを得せしめたならば、科學の進歩に寄與することの大なるを信するのである。私の在

職中、文部の當局と、この件に就き談合したことがあつたが、趣旨は兎に角、實行可能性に乏しとして、支持を受けかつた。又私自身にも、朝野に訴へる、努力と聲望は、餘りにも貧弱であつた。それ以來二十幾年は過ぎ去つた。貧弱な私は益々貧弱になつたが、その考へ丈けは、腦底から消へ去らなかつた。

昭和二十二年、その當時發賣せられた、東久邇宮殿下の著書「私の記録」を購讀した。珍しき皇族方の著書とて、私は興味を以て耽讀し、多くの感激と共鳴を感受した。東久邇宮殿下には、私は一度も拜謁の榮に浴したことがないが、兼ねてより、殿下に對しては、一種の共鳴と敬意を感じてゐた。共鳴は殿下が佛國御滯在中で、敬意は殿下が敗戦日本最初の首相として、特にその八月三十日に、日本再建の指針に就き、新聞記者と一問一答の記事を讀んだ以來である。この様な感想を抱く私は、今殿下の「私の記録」を讀んで、再三再四沈思黙考して、皇立自然科學研究所設立の私案を、腦底に埋め去ることが出来なかつた。そこで一書を裁し、「私の記録」に就き私の感想を陳述し、停年教授を論じ、軍事軍職なき今日、僭越にも皇族方の將來と

我國優秀なる青少年にまで論及し、皇立自然科学研究所設立の趣旨を明らかにし、殿下の御參考に供した。これは昭和二十二年七月九日であつたが、越へて十三日宮家の事務官本原耕三郎氏より、殿下はその書を御覧になり、御意見に感銘せられた。是非貴下に御面會、更に御意見を聽きたきに付き、来る廿日午前十一時に、來邸ありたき旨、通知に接した。私は實に思がけなき光榮に感じた。當日參邸して殿下に謁見し、詳細殿下の御諒解を得、最後に私は老齡の上、淺學不才、創立奔走の任に當るに、不適當と考へますから、他に御人選あつて然るべしとて、兼て用意して持來した、斯界の大家七名の名簿を奉呈して退去した。

八月十八日再度の御召により、參邸した。殿下より、皇立自然科学研究所創立の計畫を奏上した所、陛下には、大に御共鳴になり、且お喜び下さつたから、その旨君に通達するとの御言葉に、私は恐縮且無上の光榮に感した。猶創立に關しては、迫水久常氏（終戦内閣の内閣書記官長）を煩はしたいと思ふが、異議なきやとの、御質問があつたので、至極結構でありますと、御答へ申上げて辭去した。それから迫水氏と私との間に、時々交渉が始まつた。

十月二十四日東京電通ビルにて、第一回創立總會を開催した。東京大學より四教授、京都大學より二教授、文部省より一名を招待し、以上七名の外、主唱者側よりは、殿下と迫水氏と私が出席した。殿下の開會の御挨拶があつたあと、迫水氏は由來と經過を述べた。自然科學の各般に渉ることは、餘りに厖大になり、經費の許す限りでないので、陛下の御專攻と關連して、最初に生物學の一科と、限定して居つたので、その日の會合も、東西兩大學の醫學及び生物學の教授に限られて居た。會合の教授有志の方々からも、感想を述べられ、衷心よりこの計畫を賛成せられ、一先づ會を閉じ、別室に於て、殿下の御招宴にて、晚餐を共にし、次回は十一月十一日として散會した。

その後迫水氏等の斡旋で、財團法人科學振興會設立要綱案が起草せられ、東西兩大學にてその起草案は、専ら動植物等生物學者の協議に付せられた様子であつた。私は先に殿下に申し上げた様に、その事業を迫水氏に托し、第二回の會合には出席せず、時々出京して、迫水氏から様子_の報告を聞くのみであつた。處が或日迫水氏から、この計畫は挫折した、甚だ残念の次第である。自分は別の方法を採らんと考へて居るとしてその私案を語られたが、私は賛意を表せず、

暫く時期を待つべきであると述べて別れた。私も非常に遺憾と思つた。

この計畫は、各方面の準備が完了するまでは、新聞紙上に公にしない方針であつた。所がその年の十二月二十七日付で、中國系の中華日報と云ふ紙上で公にされた。その要旨は次の様なものである。

科學振興會設立要綱案が東京京都兩大學の動物、植物學教室を中心とする關係者に配布されたが、兩大學の若き生物學徒間に設立の動機に對する異論が出て一ヶ月に渡る論議の末ついにさた止みとなつたと云ふ「學界異變」が起つた。「同案の内容は「名譽總裁に天皇を奉戴」し資金面は恩賜資金と寄附金を以てあてゐるが、さしあたり今後一ヶ年間に運営資金一億圓を調達する云々……この相談を受けた東大京大では數回にわたり協議會を開いて討議した結果、かかる團體を設立し、全國的な資金達成運動を起すことは天皇擁護運動と結びつく危険があるから、これをそのまゝ受け入れることは出来ない、との意見に一致した……云々

これを見た私は、迫水氏の挫折報告と、思ひ合せて納得の出来るものがあるが、眞相は直接

に、私は知らない。

純粹な自然科學の研究所には、政治の侵入は許されないことは、大學のお歴々は充分御承知の筈である。日本の生物學に大貢獻を企圖するこの計畫を、政治的の動機を憂いて、阻止する若き生物學者は、偉い政治家の様にも見へる。壹億圓の寄附を蹴つて、民主國家を擁護する若き研究學徒は、幕末の憂國志士の様にも見へる。減多に大學の動植物學研究費の寄附でも申出ると、要心しないと、とんだ耻をかくかも知れない感じがせられる。迫水氏もさぞ迷惑したところと察せられる。世の中は、これを如何に觀察するか、兎に角平沼さんではないが、頗る複雑怪奇じゃ。